

書評

甦るファーガスン

—天羽康夫著『ファーガスンとスコットランド啓蒙』、
高知大学経済学会研究叢書第1号（勁草書房）1993年—

田 中 秀 夫

はじめに

本書は、著者が大学院時代から手懸けてきた18世紀スコットランドのユニークな思想家、アダム・ファーガスン（Adam Ferguson, 1723-1816）の社会思想史的研究であり、長期にわたる研究を基礎に新たに全面的に書き下ろされた力作で、高知大学経済学会研究叢書の記念すべき第1号として刊行され、同時に勁草書房から出版された。このような書き下ろしが可能であったのは、この数年の著者のファーガスンへの集中があったからであるし、さらに長期にわたる著者の忠実なファーガスンの著作の解読の努力が存在したからであることをまず指摘しなければならない。著者はもちろんファーガスンだけを研究してきたわけではない。著者のアダム・スミス研究もまた、新奇を狙ったり、独断的であったりすることのきわめて少ない、着実な業績として蓄積されており、やがてまとめられる日が来るであろう。ファーガスンについていかほどかの思想史的研究を成し遂げるためにも、思想史家として、学力とセンスと手法にまつわる力量を養う研鑽がなければならないが、実際それをわがものとするのはたやすいことではない。著者がこのような前提を優に満たしていることは本書をひもとけば、ただちに了解されるであろう。

著者は、普通には社会学の創始者のひとりとして名前こそ有名でありながら、

洋の東西を問わず読まれることも知られることも少ないこの思想家の生涯を丹念に辿るとともに、当時のスコットランドと大ブリテンの政治的・社会文化的背景との関連を視野におさめつつ、アダム・スミスより多いと思われる量をなすファーガソンの主要な著作をクロノロジカルに取り上げて、それぞれのテキストの主題と内容を紹介し、その特徴と意義を考察する。その叙述は客観的で、慎重であり、過剰解釈や短絡や独断をできるだけ排除しようという配慮が行き届いたものとなっている。それというのも、スミスに比して研究の蓄積が格段に薄いファーガソンをスミスと同じ方法では扱えないと判断した著者は、ファーガソンの「生い立ちから、思想形成過程、主著だけでなく小冊子、未定稿、書簡類をも含めてかれの全著作の紹介と分析を主としたもの」(あとがき)をまずは出版しようとしたからである。

こうして、「文明社会の危機」を鋭く衝いたファーガソンの思想の営為のほぼ全貌が、歴史的、思想的に明らかにされているのであるが、まず1では本書の概要を要約し、2で本書の功績を指摘するとともに、残された課題について書評者の見解を述べることとする。

1 本書の概要

本書は、ファーガソンを有名にした中期の代表作『市民社会史論』(1767)までを扱う前編とそれ以後を扱う後編の二部から構成され、その冒頭に、ファーガソンの思想の背景としてのスコットランド啓蒙とその研究のさまざまなコンテキストの中で、著者が重視するものを明らかにする序章が置かれている。

序章において、著者は研究史をふりかえって、ファーガソンがこれまで欧米においてどのように読まれ、問題にされてきたかをさぐっている⁽¹⁾。その狙いは真に有効なファーガソンへのアプローチと文脈——どのようなコンテキストでファーガソンの著作を読むべきか——を明らかにすることである。ここで著者は、18世紀末までスミスとともによく読まれたファーガソンが19世紀になると急速に忘れられたこと、しかし今世紀に入って社会学やマルクス主義などの諸分野からファーガソンに再び注目が集まってきたことなどを指摘する。さ

らにとりわけ60年代以降のスコットランド啓蒙研究の高揚のなかで、またその高揚をもたらしたひとつの源泉としてのシヴィック・ヒューマニズム・パラダイムへの注目のなかで、ファーガスンにもかつてないほどの関心が集まり、ファーガスンが直面し対峙した根本問題を「富と徳」の問題として再検討する気運がうまれてきたことを指摘し、著者自身も、基本的に、この新しい潮流に棹さすものであることを明確にしている。

著者は、とりわけスコットランド教会の穏健派という共通の紐帯で結ばれた知識人集団のひとりとしてファーガスンをとらえるシャーの画期的な労作⁽²⁾の問題提起に注目する。シャーは、商業文明は人間を豊かにし、幸福にするものであるか、それとも人間の徳性を衰えさせ、無力にするものであるか、という当時の知識人が直面した共通の問題にたいする啓蒙知識人の対応の差異に注目して、ヒューム、スミスが基本的に富が自由と幸福に寄与する側面を重視する「富の使徒」であったのに比して、ファーガスンをはじめとする穏健派知識人は富以上に徳を重視する「徳の使徒」であったという把握を提出した。それにたいして著者はこのようなシャーの理解を一步進めて、文明と富は人間を幸福にするだろうか、人間の徳性を脅かさないか、という問いがファーガスンとスミスをともにとらえた問題であるのだから、この富と徳、経済と道徳の両立いかんの問題こそ「アダム・スミス問題」と呼ぶにふさわしいとする。そして著者が新たに定義したこの「アダム・スミス問題」はファーガスンの根本問題であったと力説する。著者はこの問題が「二人のアダム」を（さらにはスコットランドの啓蒙知識人たちを）共通にとらえた問題であったことに力点を置いて、この「アダム・スミス問題」を執拗に問い直そうとする。これが全体を貫く主題である。

前編第1章は、スコットランドのハイランド（高地地方）を出自とするファーガスンの生い立ちと思想形成の伝記的叙述にあてられ、それを受けて第2章では、初期の著作『説教』（1746）、『民兵論』（1756）、『演劇論』（1757）、『妹ベグ』（1761）が時論的論争的文脈のなかで分析され、スコットランドと大ブリテンの抱えている問題にたいする、名誉革命と合邦を支持する立場からのファーガスンの思想的コミットメントが解明される——スミスに分業＝疎外論を示唆し

た先輩としてのファーガスンというマルクスの『資本論』での評価から、資本主義批判を行なった思想家としてファーガスンをイメージしている読者には、このことだけですでに大いに意外であろう。アダム・スミスと同年の1723年生まれのファーガスンは、名誉革命と合邦が形成した大ブリテンの既成事実のなかで成長したのであるから、スコットランドのハイランド地方というジャコバイトの勢力圏でもあったローカルな社会と文化を背景として育っていたファーガスンにとって（文化的アイデンティティー問題と）国制問題はきわめて重要な問題であったはずである。この問題へのファーガスンの対応は、著者はこのような表現は用いていないが、ケイムズのいう「合邦の完成」のコンテクストにあることが、事実上著者によって明らかにされていることは、重要である。ジャコバイト的であれ、フレッチャー的であれ、スコットランドの独立は、他のスコットランドの啓蒙知識人と同じく、ファーガスンの求めたものではない。裏返せば、なぜ大ブリテン、名誉革命＝合邦体制を選ぶのか、それはこの時代のスコットランドの啓蒙知識人が自らと同郷人に説得できなければならない問題であった。

ブラック・ウォッチ（第43ハイランド連隊）の牧師として、スコットランドのハイランド地方出身の兵士にたいして大ブリテンの自由と富と安全を守るためにジャコバイトに対決する必要を説いたファーガスンは、『民兵論』と『妹ベグ』において、大ブリテンとスコットランドの防衛体制の不備を指摘し、常備軍の補助軍として民兵制度の採用を提唱する。商業に心を奪われて安全に留意を怠った国民の繁栄は長くは続かないと考えるファーガスンは、自由人から編成された民兵軍を提案し、地主ジェントリの指導力の発揮を説いた。軍事論で指導者の徳を問題にしたファーガスンはまた演劇論で、腐敗堕落の温床となるものとして長老派から攻撃された演劇を、むしろ民衆に徳や教訓を教える効能をもつものとして擁護した。このようにファーガスンの初期著作は文明社会にあってややもすると安易に流れがちな諸階級の精神態度を再建し、強固な道徳的主体を形成することを目指すものであった。著者はすでに初期著作にファーガスンの道徳的、教育的関心が貫かれていることを明らかにしている。

第3章では、エディンバラ大学時代のファーガスンの伝記が描かれ、『ニュー

マティクスおよび道徳哲学の分析】(1766)と『道徳哲学綱要』(1769)に即して、ファーガスンの道徳哲学の講義概要が解明される。前編の最後をなす第4章は主著『市民社会史論』の分析にあてられ、その主題が文明社会における経済と道徳の対立、富裕と墮落＝公共精神の弛緩の問題、要するに「アダム・スミス問題」であることが指摘され、この問題にたいしてファーガスンは上層階級の能力と徳の強調で対応しようとしたと主張される。ここで著者はファーガスンが単純な反文明の立場にはなかったことを強調している。

商工業の発展による富の蓄積と生活の洗練は文明史の趨勢であり、それ自体は悪ではない。分業も弊害をとまなうけれども、下層階級の能力の低下はさほど深刻に憂慮しなくてよい。問題は人々が商業と富に埋没し、政治的指導者、為政者までもが、快樂に溺れ己れの本来の職務、政治と国防を忘れてしまうという腐敗・墮落が起こらないかどうかである。そしてこの腐敗・墮落、国民精神の弛緩はいつでも起こりうるのであって、したがって警戒心をなくすわけにはいかない。こうして著者によれば、ファーガスンは、政治と戦争を目的とし高貴な感情と寛大な精神をもった古代共和国の市民を理想化してながめることになる。ファーガスンは、スミスと異なり、近代文明には古代市民と異なる類型の近代市民が登場して、新しい近代市民社会のモラルとルールを形成するという展望をもち得なかった、と著者は言う。こうして、このような文脈から、古代市民を問題にする『ローマ共和国盛衰史』が後編で取りあげられることになる。

後期のファーガスンを扱う後編は、まず第1章において、70年代以降、アメリカ問題や議会改革運動でゆれる大ブリテンの政治情勢との関連で、教授を辞し、アメリカ問題にコミットして以後のファーガスンの後半生の伝記を描くことから始まる。ここでは、ワイヴイルを指導者とするヨークシャー運動（議会改革運動）の呼び掛けに対して、体制を擁護するファーガスンの運動批判の分析をはじめとして、多くの新知識がもたらされている。

第2章では、『プライス論』(1776)の論旨やアメリカとの和解をさぐるカーライル使節団の秘書としての活動などを分析して、ファーガスンのアメリカ観と帝国観が浮き彫りにされる。ファーガスンは、大ブリテンの保護のもとで成

長したアメリカが分離独立することを容認できなかった。アメリカの独立は大ブリテンの商業、航海、漁業、領土を脅かすし、アメリカ自身をも内部の利害対立で分裂に陥れるとみたからである。このように、ファーガスンは重商主義的な植民地観に立つとともに、他方で、大ブリテンの名誉の維持も強調しており、名誉革命体制の動揺によって保守化していった、と著者は把握する。

最終章をなす第3章では、後期の名著『ローマ共和国盛衰史』（1783）とファーガスンの道徳哲学の集大成である晩年の大作『道徳政治科学原理』（1792）が分析され、さらに草稿として残された「論説集」の多様なトピックスが紹介され、そのうちの道徳を論じたいくつかの論説の内容は分析されており、ストアの影響が指摘されている。フランス革命についてのファーガスンの見解も紹介されている。『ローマ共和国盛衰史』の焦点は共和政体がいかにして滅んだかにある。著者は、ファーガスンの史論の筋を丹念に追っているが、その骨子を要約することは不可能なので割愛する。著者は、共和政を活気づけていた精神と活力の喪失とともに共和政は滅び、帝政に移行したが、帝政下での平和は、文芸の開花をもたらしたとしても、失われた活力を償うものでなかった、と説くものとしてファーガスンの史論を総括している。そして最後の大作に著者が見るのは、仁愛を道徳の基本とする道徳論であり、それは著者によれば、下層の人々の義務の世界としての経済的世界を指導するジェントリのための道徳論であった。この道徳論がスミスの共感論批判であることも指摘されている。エピローグは、最後まで、公共精神、徳の重要性を説き続けた「最後のローマ人」としてのファーガスンの最晩年の孤高の姿を描いている。

2 本書の成果と残された課題

本書はファーガスン研究のモノグラフとしてわが国で最初の業績であるが、その水準は高く、わが国のファーガスン研究を一挙に欧米の研究水準にまで引き上げるとともに、ある点ではそれを凌駕さえているということができよう。本書の注目すべき成果は次の点に求められる。

第1に、著者は、長命なファーガスンの生涯と行動を視野に収めたうえで、

有力な二次文献を必要に応じて参照しながらも、著者のいう「アダム・スミス問題」を中心テーマとして意識しつつ、原典（テキスト）を忠実に読むという思想史の正攻法によりつつ、必ずしも容易でないファーガスンのほとんどすべての著作にアクセスし、それに検討を加えて、その思想の全貌を、少なくともその輪郭を再構成することに成功した。これは希有の仕事であり、著者の努力は尊敬に値する。

第2に、著者は、ファーガスンの思想の核心が、終始一貫して、文明社会の批判的分析にあり、文明社会が陥りがちな道徳的弛緩への警鐘、文明社会の道徳的批判であることを説得的に示した。歴史をふりかえるなかで、また人間の本性を経験的に分析することによって、ファーガスンは文明の発展、歴史の進歩を必然として認めつつも、しかしつねに文明と社会には腐敗墮落の危険性がまわりついていると考える。代表作の『市民社会史論』に看取されるように、ファーガスンの基本的主張は、人々が文明の成果——富、自由、文化——を享受しそれに溺れ、公共精神と軍事的国民精神を失うとき、その文明は危機に直面するというものであった。商業文明の時代にいかにして「富と徳」は両立するかという問題にたいして、社会の指導的階級であるジェントリの公共的役割を強調したことに、——新しい市民社会論を展開したスミスと異なる——ある意味で後進的なファーガスンの思想の独自性を著者は見る。富と徳の自然的一致は成立しないというのである。しかし、ファーガスンは進歩に反対なのではない。古き良き時代へのノスタルジアはファーガスンのものではない。ファーガスンは、著者によれば、下層階級の勤労の徳と上層階級の政治的徳の結合による文明の危機の克服という戦略を描いていたという。もちろん、この戦略自体は、特段ファーガスンにのみ独自のものではなく、最近のスミス研究はスミスにも近似した主張を見いだしているが、道徳哲学から出発して経済学を構築していったスミスと、最後まで道徳哲学に踏み止まり、経済学を展開することのなかったファーガスンの根本的差異を著者は明確にしたと言えるであろう。

第3に、忠実なテキスト研究と歴史的背景すなわちコンテキストの研究の結果、著者はファーガスンの思想をその理論的次元と政治的・イデオロギー的次

元を関連づけてとらえることに成功した。すなわち、内田義彦が名著『経済学の生誕』（1954）において夙に意識的に実践し模範を残した、またアルチュセールがそのモンテスキュー論⁽³⁾で巧みに遂行してみせた、理論と時論（イデオロギー、意図、価値の選択）の総合としてのテキスト分析が行なわれ、スコットランドの知識人であるよりも大ブリテンの知識人としての言説の優位とその意味が明らかにされている。すなわち、著者は、ファーガスンがスコットランドのハイランドを出自の背景とすることから予想されがちな、パロキアルな思想家ではまったくなく、すでに初期ファーガスンの文明社会論の枠組みが、抽象的な歴史哲学的な議論にとどまらず、名誉革命と合邦を支持する立場にたち、近代の商業と分業を前提にする、文明社会の批判的考察にあることを明確に指摘するとともに、後期ファーガスンの思想は、アメリカ問題を契機に、名誉革命体制＝大ブリテン＝植民地帝国の現状維持に力点を移し保守化することを解明した。

第4に、特筆すべきことは、忠実な原典研究の著しい成果として、これまでわが国ではとりあげられたことのない『演劇論』と『妹ペグ』を内在的に分析して、スコットランドと大ブリテンの演劇論争と民兵論争にたいするファーガスンの貢献が明らかにされたことである。とりわけ、著者は、日本人には難文といってよい匿名の著作『妹ペグ』の内在的な解釈によって、スコットランドに民兵制度を要求するこの対話編の思想がファーガスン独特のものとなし得ることを説得的に論証し、レイナーによって提唱されたヒューム著者説⁽⁴⁾を著者は自信をもって否定しえた。レイナーの編著に初めて接したときに、筆者はレイナーの推論に説得力を感じたことがあったが、その後の研究の進展のなかで、レイナー説は次第に退けられ、今回の著者の仕事で、ほぼファーガスン著者説が確立したように思われる。

第5に、著者はファーガスンのアメリカ問題への関与の全貌を解明したが、これはケットラーと筆者の不徹底な研究を凌ぐ成果である。ここで著者が分析の俎上に乗せたのは、『ブライス論』（1776）だけでなく、カーライル使節団の『随行録』、1779年2月のW・イーデン宛手紙などに及んでおり、分析はきわめて周到であって、課税権の放棄を土産にどうにかアメリカを帝国にとめおきた

いというカーライル使節団の実現しなかった妥協案は、帝国と植民地の従属関係を所与として堅持すべきものと考えたファーガスンには生温いものであったことが、説得的に示されている。

第6に、著者が後期ファーガスンの大冊である『ローマ共和国盛衰史』と『道徳政治科学原理』の分析にも先鞭をつけ、その概要を明らかにしたことも、それ自体として大きな意義がある。膨大な著作に取り組むという仕事は困難な作業であるがゆえに、その作業を遂行した著者の努力は貴重である。

さらに、ファーガスンが草稿で残した「論説集」の編集・出版を準備中⁽⁵⁾の著者は、その内容の紹介によって、晩年のファーガスンの知的関心の広がりについて新知見を提供しているし、また、著者が綿密な調査を踏まえて作成したファーガスンの著作目録は厳密をきわめており、今後のファーガスン研究にとって必須のものである⁽⁶⁾。

以上のような成果をもたらした本書は、今後の内外のファーガスン研究の確かな出発点となるであろう。しかし、本書にはいくつかの問題点と課題もまた残されている。

第1に、本書の主題は明確なのだが、叙述が浮かび上がらせる全体の輪郭は、鮮明さに欠くところがある。とくに後半部の叙述がいささか平板になっている。その理由は、細かく言えば、ポレミックな議論の展開が一部にとどまっていること、ファーガスンの思想を位置付ける縦と横のコンテキスト分析が薄いこと、すなわち前後の時代の思想家および同時代の思想家との関連の検討が十分でなく、フレッチャー、モンテスキューやヒューム、ルソー、カーライルなども少しは顔を出すけれども、有効な参照軸として随所で利用されている思想家はほとんどアダム・スミスだけに終わっていることに関わる。スミスだけでなく、少なくともハチスンとヒュームを参照軸として利用した叙述がなされていれば、著者のファーガスン研究はいっそう陰影に富む実像に迫った魅力的な成果となっただろうと惜しまれる。

また、たとえば、民兵論についていえば、ロバートスン⁽⁷⁾とシャーの分析をはじめとしてスコットランドの民兵論争の全体の枠組みが相当明らかにされているので、著者はそれに譲ったのであろうが、ここは論争にもう少し踏み込

んで欲しかった。そうすれば、スミスとの比較だけでなく、ケイムズやヒュームとの差異もまた浮かび上がることになり、叙述がいつそう豊かになったであろう。また演劇論は、わが国では最初のテキスト分析の試みであり、その業績は称賛にあたいするけれども、惜しむべきはシャーの分析を踏まえて、演劇論争の全体にもうすこし肉薄するところがあったら、と思わざるをえない。

この点は、わが国の研究水準もまた制約になっている。著者は、ファーガソンの思想をそのテキストに即して客観的かつ正確に描きだすことをまず最初に必要な課題として設定したために、自由に議論を展開できなかつたという事情があると思われる。350ページの書物は大冊だとはいえ、ファーガスンのような比較的多作の思想家の全貌を再現するには、それでも小さすぎるのである。300ページ程度に押さえるというわが国の学術書出版の慣行はそろそろ再考すべきである。

第2に、著者は、ファーガスンはスミスの同感論を道徳の基準を示すものではないとして退けたという興味深い指摘をしているが、この点の追究はもう少し詳細にしてほしかった。なるほど著者は一応の説明は与えている。すなわち、同感という主観的なものは道徳的是認の原理たりえないというファーガスンは、少数者の同感多数者の同感をえないかもしれないし、同感自体が誤っていることがありうるということから、道徳的是認の原理は「完成あるいは卓越の観念」でなければならず、それは結局、「仁愛」であるとする。そうだとすれば、ファーガスンの道徳論はその核心において、ハチスンに非常に近いものがあるように思われるし、さらに追究すべき問題が残されているように思われる。例えば、スコットランド啓蒙の中核をしめる道徳哲学という学問ジャンルに属する著作を残した思想家は数多く存在するが、そのなかでファーガスンはいったいどのような位置にいるのか、必ずしも判然と浮びあがっては来ないのである。いずれにしても、著者の説明は、明快であるにもかかわらず、いささかあっさりしていて、説明不足という印象を否定できない。このようなものたりなさは、ファーガスンの道徳哲学における正義論の説明がないという事実とあいまって、いささか肩すかしの感を与える結果となっている。

第3に、著者はファーガスンの思想の重要なひとつの特徴をジェントリの政

治的、社会的役割の重視にみるが、しかしそれはスコットランドとイングランドの同時代の思想家にかなりな程度まで共通の傾向であるから、ファーガスンの独自性の検出にとっての有効性は限られているであろう。またジェントリの概念はトーニー（R.H.Tawney, 1880-1962）以来のイギリス史研究において使いふるされた概念として、多くの陰影を帯びているので、今日その概念をいはばキーワードとして用いるのであれば、その概念内容の吟味もほしいところである⁽⁸⁾。流行の表現を使えば「シヴィック・リーダーシップ」の問題であるが、著者はこのような新しいテクニカル・タームを禁欲しているので、ジェントリ主導の指摘となったのであるが、それは賢明な選択だろうか。さらにまたファーガスンの経済観を重商主義的とするのも、今日の議論としては大雑把すぎるであろう。それは次の点と関連している。

第4に、著者は序章で、最近のスコットランド啓蒙研究の動向に論及しているが、本文では、自然法思想とファーガスンの道徳哲学の関連の解明についても、(今述べたように)シヴィック・パラダイムの概念によるファーガスンの思想の解釈についても禁欲している。著者がシヴィック派の解釈に親近性を感じていることは序章に明らかであるが、著者は自らの立場を本文ではあいまいにしているという印象を否めない。随所でシャー以下の研究に言及しながらも、解釈の枠組みを象徴するキーワードの使用を避けているために、著者の議論と欧米の研究とが総合されて相乗効果を発揮するには至っていない。このような点で著者は不徹底であったように思われる。さらに長老派の穏健派牧師でもあったファーガスンの長老主義についても十分に掘り下げられていない。その結果、ファーガスンの道徳の概念とキリスト教、ストア哲学、シヴィック・ヒューマニズムとの関連も問われてない。つまり、このような概念のマトリックスを適切に用いれば、ファーガスンの道徳哲学の特質が、より克明に浮かびあがるのが可能となるのではないだろうかという思いを禁じえないのである。シャーは、ファーガスンを含む穏健派知識人の思想をウィッグ長老派的保守主義と規定して穏健派イデオロギーの解明を試みたが、著者はこの点でのシャーの仕事からもっと多くを吸収して、自らのファーガスン分析に利用できたのではないだろうかと思われる。

第5に、著者は、ファーガスの後期の名著『ローマ共和国盛衰史』にわが国でほとんど初めて取り組んだのであり⁽⁹⁾、その読み方は正確で信頼できるし、またファーガスの史論は啓発的でさえあることが十分に示されている。したがってその功績はいうまでも大きいですが、思想史的分析としては、ファーガスの思想の独立した分析に止めるのではなく、啓蒙時代のいくつものローマ史論——モンテスキューの『ローマ人盛衰起源論』、ギボンの『ローマ帝国衰亡史』など——との比較も、少なくとも、その意図の比較は試みて欲しかった。国王ジョージ3世に献呈されたファーガスの『ローマ共和国盛衰史』を、グラックスやカトーを賛美し、改革を提唱するカントリ・イデオログのローマ史論を退ける体制派（Court Whig）の史論として、ブリテンの現体制を維持することをイデオロギー的的目的としてもつ著作として読む試みも存在する⁽¹⁰⁾。

しかし、以上で指摘した残された問題点は、書物のスペースと叙述方法にも大いに関わりがあり、今回の著者は、あえてファーガスの思想をテキストに即して提示することによって、その思想の基本的な姿、特徴を客観的に描きだそうとしたのであるから、これはこれでよしとすべきなのかもしれない。

いかなる研究にも残された課題を指摘することができるであろう。したがって、以上の私見は本書の欠点の指摘では必ずしもない。本書がそれ自体として見事な業績であることを筆者は否定するつもりはまったくないからである。著者は、本書を強固な基礎かつ出発点として、今後いっそう広く深いスコットランド啓蒙の研究を遂行することが期待される。折しも、ファーガス研究の新しい成果がまた刊行されようとしているとの情報がエディンバラの著者からもたらされた。メローレのファーガスとミラーについての研究が10月にイタリアで出版される予定であり、Fania Oz-Salzberger が『市民社会史論』の新版をケンブリッジから出版する予定で編集をすすめていること⁽¹¹⁾、メローレ編のファーガス書簡集は来年春に出版の予定であることなどである。また『市民社会史論』の新しいフランス語版が一昨年に出版されている。こうしてファーガスはいまや甦りつつあると言って過言でないだろう⁽¹²⁾。

(1994年9月)

(注)

- (1) 著者はわが国の研究史を無視しているわけではない。しかし、巻末の著作目録が示すようにわが国の研究は、著者の論文を除けば、大野精三郎、水田洋、佐々木純枝の複数の論文の他には、佐々木武、小柳公洋、伊藤達夫、鈴木秀勇、筆者の論文がある程度にすぎない。
- (2) Richard B. Sher, *Church and University in the Scottish Enlightenment*, Edinburgh U.P., 1985.
- (3) アルチュセール、西川、阪上訳『モンテスキュー政治と歴史』、紀伊国屋書店、1974.
- (4) David Raynor ed. and intro., *Sister Peg: a pamphlet hitherto unknown by David Hume*, Cambridge, 1982.
- (5) 1994年6月からエディンバラに滞在中の著者の第一の課題は、このファergusンの「評論集」のテキストの編集の完成にあり、これはやがて近い将来、臨川書店から出版される予定になっている。
- (6) 著者の文献目録に記載されていない『市民社会史論』の外国語訳として次の三点があることが、エディンバラの著者から伝えられてきたので、記しておく。
Forsok till Historien om Borgerligt Samhalle, Stockholm, 1790 (Swedish edition).
Essai sur l'histoire de la société civile par Adam Ferguson, traduction de M. Bergier, Paris, 1783, traduction révisée, annotée et introduite par Claude Gautier, Paris, 1992. (序文はボーコックの影響を受けたものとのこと。)
Un ensayo sobre la historia de la sociedad civil, par Adam Ferguson, Madrid, 1974.
- (7) John Robertson, *The Scottish Enlightenment and the Militia Issue*, Edinburgh: John Donald, 1985.
- (8) 最近のイギリス近代史研究の新しい成果として、地主貴族の役割に注目した研究があり、こうした研究を思想史研究にどう摂取するかという課題も生まれつつある。水谷三公『英国貴族と近代——持続する統治1640—1880』、東京大学出版会、1987.
- (9) マイネッケの『歴史主義の成立』(Friedrich Meinecke, *Die Entstehung des Historismus*, 1936, 菊盛、麻生訳、筑摩叢書、1967—68)を種本とする千代田謙の『啓蒙史学の研究』(三省堂、1945)という例外も存在するが、これは独自にテキストを研究した成果とはみなせないものである。
- (10) Frank F. Turner, "British Politics and the demise of the Roman Republic: 1700—1939," *The Historical Journal*, 29—3, 1986, pp. 584—7.
- (11) Vincenzo Merolle, *Saggio su Ferguson con un Saggio su Millar*, Gangemi Editore. Fania Oz-Salzbergerの最近の論文として、"The Rejec-

tion of Conflict : Adam Ferguson's German Readers," *Transaction of the Eighth International Congress on the Enlightenment*, 1992 ; "From Male Citizen to Neuter Mensch: The Emasculation of Adam Ferguson's Civic Discourse by the German Enlightenment," *Eighteenth-Century Scotland*, no. 7, 1993. また著書, *Translating the Enlightenment: Scottish Civic Discourse in Eighteenth-Century Germany*, Oxford U.P. が近刊予告されている。

- (12) James Sheets, "Adam Ferguson: The 'God Preceptor' of Empire" Ph. D. diss. University of Rochester, 1993 も記しておこう。ファーガソンの書簡集は予告によれば, *The Correspondence of Adam Ferguson*, 2 vols., General ed. by V. Merolle, Volume ed. by W. Wellesley, Intro. by J. B. Fagg, (The Pickering Masters) 1995, Pickering & Chatto.